

論 文

旧制広島高等学校資料、同窓会収集資料としての特質について

小 池 聖 一

はじめに

広島大学文書館が所蔵する旧制広島高等学校資料は、同校の同窓会から寄贈を受けたものであり、「旧制広島高等学校資料」として目録を刊行し、二〇〇八年(平成二〇年)一〇月より公開している(広島大学文書館編『広島大学文書館所蔵旧制広島高等学校資料』)。本稿では、広島高等学校同窓会によって収集された旧制広島高等学校資料について、その来歴から見た特質を明らかにすることを目的としている。

広島大学文書館(以下、文書館と略記)は、その設立にあたり旧制広島高等学校(以下、広高と略記)出身の元文部事務次官・故木田宏氏¹⁾をはじめ、広高出身の多くの方々にご尽力いただいた。

そして、文書館は、旧制広島高等学校資料の他、広高出身者の個人文書も多数所蔵している。具体的に、文書館平和学術文庫の中心資料として金井利博関係文書(中国新聞論説主幹)、平岡敬関係文書(中国新聞論説主幹)があり、その他に栗屋敏信関係文書(元建設事務次官

代議士)等を整理し、目録化したうえで公開している。また、企画展「広高26年の歴史」展(旧制広島高等学校創立八〇年記念二〇〇三年一月一日～一九日、於広島市立中央図書館)をはじめ、二〇一三年一月一日にオープンした大学院総合科学部展示コーナー「旧制広島高等学校の青春―総合科学部の源流―」など、展示を通じても広高同窓会と密接な関係を築いてきた。²⁾

こうしたことから、広高の特性と同窓会収集資料としての旧制広島高等学校資料の特質を解析することは、文書館の責務であると考えている。

広高は、一九二四年(大正一三年)に創立され、一九五〇年(昭和二五年)三月に戦後の学生改革によって学園が閉ざされるまでの二六年間、約四八〇〇名の有為の人材を社会に供給した。資料を通じて広高関係者の方々の思いを伝え続けることは、文書館が果たすべき重要な使命の一つであると考えている。

以下、まず、広高の創設や校風等を概説し、同窓会資料として生成された広島高等学校資料がどのような特徴を有するものであるかを述

べることとしたい。

1 旧制広島高等学校の概要

1-1 広島高等学校の創設

一八九四年(明治二十七年)に公布された高等学校令により、地方の核地にも大学予科としての高等学校の設置が求められた。一八九八(明治三十一年)一二月、第一三回帝国議会貴族院で「高等学校及帝国大学設置に関する建議案」が提出・可決されると、中国地方においても第六高等学校の設置が内々に交渉され、各県は争奪戦を繰り広げた。特に、広島県と岡山県は激しい誘致合戦を行ったが、結果として岡山設置が決まり、広島は一敗地にまみれることとなった。

第一次世界大戦後、高等普通教育機関としての性格を再定義した新たな高等学校令が、一九一八年(大正七年)一二月に公布され、高等諸学校の創設拡張計画が実施されていたが、中国地方で新たに高等学校が設置されたのは山口県であった。

このように、高等学校誘致にあたり、広島県・広島市の体制は、常に後手に回っていたが、一九一九年一月二五日、気鋭の実業家による広島経済研究会新年会で、熊平源藏が中国地方第一の都市である広島市に高等学校がないことを憂い、広島財界が中心となって要望すべきであると提案したことで、新たな広島高等学校設置運動が開始された。

民間主導で期成同盟会が設置され、官民合同・一体化した運動が展開された。しかし、文部省は、既設の岡山・山口県の他に鳥根県、愛

媛県にも設置が決まっており、広島県にも広島工業高等学校の設置が決まっていたことから、新たな寄付金募集に対しても難色をしめした。このため、期成同盟会では県民の熱意が必要である判断して県民大会を開催し、当初、設置絶望との報道もなされたものの、一九二〇年(大正九年)三月一〇日、文部省より設置決定の通知を受けたのであった。

広島高等学校は、一九二三年(大正一二年)二月一〇日、勅令第五〇一号をもって設置された。初代校長には、第三高等学校教授十時彌が就任。その後、学則以下の諸規程、学校施設が整備されていき、一九二三年四月一二日に第一回入学式が行われ、同一四日から、授業も開始された。なお、開校式は、大正天皇の死去にともない延期され、一九二八年(昭和三年)一月一二日に挙行されている。

1-2 広高の特色と学風⁴⁾

全国二五番目の官立高等学校として設立された広島高等学校は、岡山・山口・愛媛・鳥根の各県に高等学校が設置されていたこともあり、生徒の過半は、広島県出身者であった。しかし、石田雅春が第一期生(一九二四年四月入学、一九二七年三月卒業)から第一期生(一九四〇年四月入学、一九四二年九月卒業)までの「学校一覽」を分析したように、本籍地としては中四国地方の出身者が多いものの、出身校別にみるならば、中四国地方といっても山口県を除けば、近隣県からの入学者は多くなく、むしろ、大都市圏(東京府、大阪府、兵庫、京都府等)からの学生が一二・七%を占めていた。また、当時、

「外地」と呼ばれた朝鮮・関東州・満州（中国東北地方）の学校からの入学者も多い。この背景には、高等教育機関が拡充されたものの、入学競争率が平均五〜一倍という高率であったことがあげられる。

また、父兄の職業構成は、一九二〇年代から三〇年代にかけての社会構造の変化に対応して、高等教育をうける階層の中心が、地主・小企業経営者等から新中間層と呼ばれた会社員、官公吏、教員などの俸給生活者に移っていた。広島高等学校の場合、呉市に海軍鎮守府があったため、軍人の子弟が多いのも特徴であった。結果として、広島高等学校生の学資金は、全国平均をやや上回る九一・四三%が家庭のみからであり、四三〇名中、内職として家庭教師をしている者二二名、育英会の奨学金を受けている者は七名に過ぎなかった。生徒の生活ぶりは、支出月額が一九三八年（昭和十三年）で三〇円程度、そのうち、二二円前後が住居費・食費であり、質素ではあるが、「苦学生」というものではなかった。

そして、大学への進学状況を見るならば、半数以上が東京帝国大学か京都帝国大学に進学している。広島の場合、基本的に現役進学率は、戦時下で入学率が上がる昭和一七年以降を除いて、約七二・二%であった。残りは、「白線浪人」とよばれた浪人生、あるいは、後述する「広島事件」等もあり中退している。そして、浪人生の過半も東京帝国大学か京都帝国大学に進学したのであった。

1-3 広島事件、被爆、そしてその終焉

1-3-1 広島事件

初代校長十時彌は人格者であり、彼の命名による薫風寮の運営などにおいても、北島霞江きたじまかこう生徒監を中心とする教師団と生徒との交流も密であり、ある意味、理想的な学園生活を広島生は送ることができたと思われる。しかし、十時校長の転出を契機として大きく暗転することとなった。

昭和初期は、マルクス主義社会科学の影響が旧制高校にも広がりを見せていた時期でもあった。一九二六年（大正一五年）、文部省からの内訓によって社会主義研究は禁止されたものの、広島でも一九二七年（昭和二年）、広島社会主義研究会が結成された。しかし、生徒側は無関心な者が圧倒的多数であり、関係者のほとんどは薫風寮から退寮していった。一九二八年の三・一五事件以後、文部省の思想対策が強化され、薫風寮においても思想善導室が設置された。この後も、検挙者が発生するなどの事案があったが、生徒は一時退寮処分となっても復帰して大学に進学するなど、穏健な指導が行われた。

このような体制は、一九三二年三月、十時校長の第五高等学校長への転出とともに失われ、生徒指導をめぐる教授間の対立に起因して大きな騒動となったのが「広島事件」である。「広島事件」は、十時校長・北島教授につらなる「正論派」と、学生処分のあり方を問題視していた上浦種一教授等の「暗流派」との対立のなか、第二代校長新保寅次が指導力を全く発揮せず、教授間の対立が激化し、一九三三年から一九三四年にかけて、いわゆる「正論派」教員の解任・解雇が続出し

たことに起因する。「正論派」との呼称が生徒側から名付けられたものであったことに象徴されるように、生徒及び同窓会からは、学園浄化の声明書・決議書が出され、生徒側は寮生大会を開催して「暗流派」五教官に対する辞職勧告書を一九三四年六月五日に発表し、翌日の生徒大会で目標達成まで授業のオールポイコットを決議し、これを実施した。学校側は、生徒大会を認めず、三日間の臨時休校措置をとった。心労により卒倒した新保校長から校長事務を託された下田卯市首席教授は、六月一日、生徒側の要求を受け入れ、五教員の処分をすすめた。一方、本事件に対しては、内務省警保局学生思想係も関心を示し、六月二三日から七月四日にかけて、共産党中国地方広島県再建委員会と連絡を有しているとして自治学生会の摘発を開始し、四二名もの生徒を逮捕し（他に、卒業生七名（東大四、京大三））、取り調べを行ったのである。

最終的に、文部省は、六月二六日付で新保校長を休職、石井忠純督学官を校長事務取扱とし、両派の教授を一掃し、調停役となっていた下田・中島一郎・日高第四郎教授も含めて、依願免官の形式をとって罷免した。八月七日、免官となった新保校長の後任として新潟高等学校校長岡上梁が着任すると、新学期開始の九月六日に生徒の大量処分を断行した。この結果、運動の中心であった薫風寮から多量の処分者を出したため、責任を感じた委員をはじめ退寮者が続出し、生徒は、カフェーや料理屋で遊興にふけるようになり、寮は退廃した雰囲気になったとされる。

1-3-2 被爆と広高

一九三七年以降、国体明徴のもとで教育刷新が行われ、一九四三年の高等学校令等の改正、理科増募、在学年限の短縮、そして、一九四四年度、文科系学生の学徒動員という軍国主義化のなかで、広高における学生生活も兵営化していった。一九四〇年の校友会解散、報国団の結成、寮を修練組織となし、一九四四年以降は、課外活動もなくなり、勤労働員が本格化した。そして、一九四五年八月六日午前八時一五分の原爆投下により、爆心地から二・七km離れた皆実町の校舎は、鉄筋コンクリート造りの講堂等には大きな被害がなかったものの、木造校舎、薫風寮はほぼ全壊した。勤労働員中であつた一年生（昭和二〇年度入学生）は、休電日で外出中に被爆した者が多かった。被爆死没者数は五四名、うち二七名は、即死ないし昭和二〇年中に死没した。教員も二名被曝死し、うちの一人は、歌人としても知られた国文学教授中村光風であつた。

被爆は、広高生だけでなく同窓生、彼らの家族にも犠牲を強いたのである。⁶⁾

1-3-3 戦後、広高の終焉

広高は、校舎が倒壊したため、広島県大竹市の旧海軍潜水学校跡地に移転して一九四六年（昭和二十年）二月一日に再開された。敗戦に伴う引揚学徒の転入学、陸海軍諸学校出身者、在外者の編入学が行われ、軍諸学校からの編入者が広高生の過半数を占めた。

戦後、校友会が再建され、教科内容も一新するなか、皆実町への復帰運動が開始され、一九四七年九月に復帰を果たした。戦後の混乱の

なか、自治会が結成され、授業料値上げ反対闘争などの学生運動も行われたが、多くの生徒は、大学入試のための準備に没頭する状況であった。

戦後の教育改革により、広高は、一九四九年五月三十一日、国立学校設置法の公布と共に教養部として広島大学に包括された。そして、広高は、一九五〇年二月二十五日、最後の卒業生を送り出しその歴史の幕を閉じたのである。

以上のように広高の場合、広島との密着性、出身階層等から学生気質としては、旧制高校特有の弊衣破帽、長髪に朴菌の下駄といういで立ちや、寮生を中心としたストームといった既成の旧制高等学校像とはかなりちがったものであったと考えられる。ストームなどは、広高薫風寮でも創設期にはおこなわれたが、戦時色が強まると困難になっていった。また、後発の高等学校である広高は、高等学校進学が大学入学を保証するものではなかったため、希望の大学（東京帝国大学や京都帝国大学）に進学するためには、絶えず勉強しなければならなかったであろう。昭和期の広高は、明治・大正期のナンバーズクール旧制高等学校とは異なり、高学歴を求める俸給生活者の家庭の増加を背景に、生徒の多くが大学進学のために勉学に励む学生生活を送っていたものと考えられる。その学風・学生は、広島県内の出身者が過半を占めるため、広島に對する強い地域性を有し、「一般に広高生は高師、高専の影響もあつてか、土地柄か、他の地方高等学校に較べ非常に穏和で学究的紳士的であるとの定評」であつたとされるものであつた。⁷⁾

また、広高の場合も、広高事件にみられる学園事件があり、背景には思想問題も存在したものの、事件への生徒・同窓会の参画は薫風寮を中心とする教官と生徒との関係が重要な理由であった。また、広高の場合、広島市が世界最初の被爆地となったことで、生徒間および同窓会の凝集力がより強いものとなったと考えられる。このことは、現在、広島大学附属高等学校となっている皆実町の旧広高講堂で行われた広島同窓会では、校鐘「広高の鐘」（現在、文書館が保管・展示している）を鳴らし、被爆者・戦没者に対する黙祷から同窓会が開始されたことから理解できる。⁸⁾

そして、広高は、卒業生の多くが東京帝国大学・京都帝国大学に進学したことから、政財界・官界・学界に多くの有為の人材を輩出した。代表的な出身者は以下の（表1-1）のようなものであつた。⁹⁾

2 同窓会と資料

2-1-1 広島大学文書館所蔵「旧制広島高等学校資料」の生成過程¹⁰⁾

広島大学文書館は、旧制広島高等学校資料二、一九九点を所蔵している。広高自体の資料は、（表1-2）のように、広島大学文書館、広島大学総合科学部、大倉精神文化研究所の三カ所に保存されている。文書館所蔵の旧制広島高等学校資料は、広島高等学校同窓会収集広島中央図書館旧蔵資料を中核とする同窓会関係資料で構成されている。広島大学総合科学部所蔵の旧制広島関係資料は、行政文書が中心であり、大倉精神文化研究所所蔵資料は沿革関係の資料群である。

(表-1) 著名な広島出身者

氏名		出身大学	
政官界			
栗屋敏信	東大	建設事務次官、衆議院議員	
増岡康治	東大	建設省河川局長、参議院議員	
岡本 悟	東大	運輸事務次官、参議院議員	
梶野泰二	東大	弁護士、衆議院議員	
永野鎮雄	東北大	参議院議員	
永野巖雄	東大	検事、広島県知事、参議院議員	
荒木 武	東大	広島市長	
平岡 敬	早大	中国新聞常務、広島市長	
吉光 久	東大	中小企業庁長官	
小松勇五郎	東大	通商産業事務次官	
安田 巖	東大	厚生事務次官	
吉村 仁	東大	厚生事務次官	
木田 宏	京大	文部事務次官	
井内慶次郎	東大	文部事務次官	
経済界			
佐々木邦彦	東大	富士銀行頭取	
上野淳一	京大	朝日新聞社主	
大原栄一	東大	富士重工社長	
山本 朗	東大	富士重工社長	
岡田 茂	東大	東映社長	
岡野良定	京大	三菱自動車工業社長	
森田 康	東大	日本経済新聞社社長	
その他			
近藤芳美	東工大	歌人	
丹下健三	東大	建築家	
阿川弘之	東大	作家	
富士川英郎	東大	東大教授(独文学)	
大田 堯	東大	東大教授、教育学者	

(表-2) 広島関係資料の所在

- 広島大学文書館所蔵「旧制広島高等学校資料」(2,119点)
 - 学校刊行物 28点、創設関係 24点、校務関係 136点、広島事件 8点、戦後復興関係 6点、授業関係 290点、学園生活 117点、文芸誌・会誌類 99点、写真類 257点、頒布物 28点、著書類 447点、物品類 61点、同窓会 353点、個人資料 60点、その他 34点、関連資料 171点
 - 内訳
 - (1) 広島高等学校同窓会収集広島市立中央図書館旧蔵資料(「旧制広島高等学校資料総目録」所収資料) 1,359点
 - (2) 広島高等学校同窓会収集広島市立中央図書館旧蔵未整理資料 269点
 - (3) 広島大学 25年史編集室旧蔵資料 30点
 - (4) 広島大学 50年史編集室旧蔵資料 17点
 - (5) 広島大学文書館設立準備室旧蔵資料 210点
 - (6) 広島大学文書館収集資料 305点
- 広島大学総合科学部所蔵 旧制広島高等学校の行政文書等
 - 教職員人学関係簿冊 12冊、生徒記録 32冊、成績表(昭和2年~20年、22年以降) 5箱、雑書類(昭和19、24年) 2冊、広島高等学校一覧 11冊、生徒便覧(昭和16年) 1冊、同窓会会員名簿 8冊
- 大倉精神文化研究所所蔵「旧制高等学校文庫」内の関係資料
 - 沿革史誌類 14点(うち9点は複写資料)、設置関係資料 2点、学校一覧 6点、図面 1点、同窓会名簿 3点、同窓会報 1種(はは揃)、創立記念関係 1点、卒業生座談会テープ 1点、

(小宮山道夫「解題」『広島大学文書館所蔵「旧制広島高等学校資料」』)

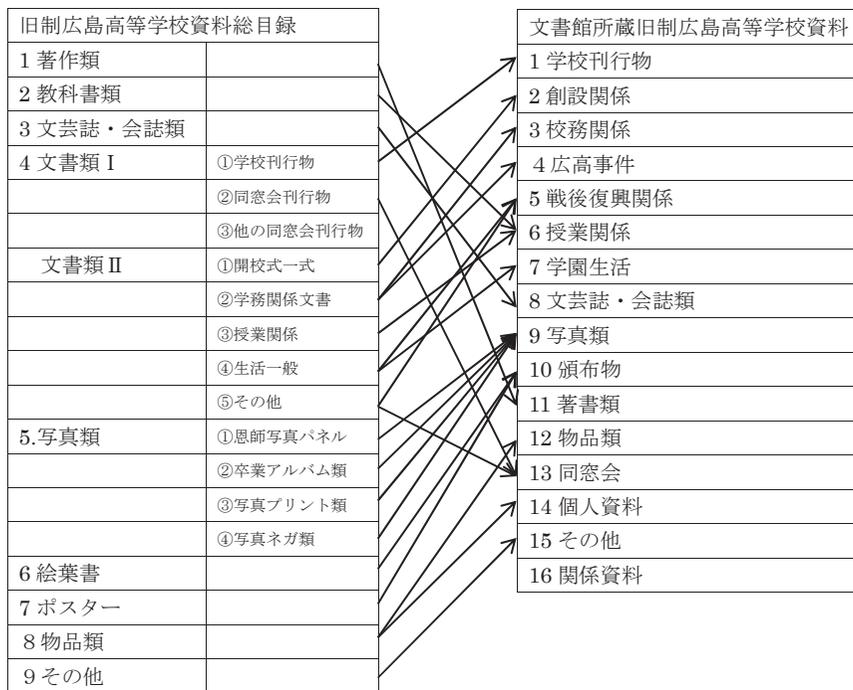
広島同窓会による資料の収集は、一九七三年(昭和四八年)の創立五〇年が契機であった。広島同窓会では、創立五〇年にあたって一九七〇年六月の総会で三つの記念事業―記念式典の挙行、広高の森の建設、広高記念誌の発行―を行うこととした。記念事業の一つである広高の森の建設は、同窓生と広島との地域的な結びつきをいつまでも残し、「郷土の恩顧にいささかなりともむくいたい」として計画されたものであり、現在、広島市中央公園の一角に、市民の憩いの場を提供している。¹¹⁾ 記念誌とは、羽白幸雄(昭和四年文乙、一九四四年より、ドイツ語教授、広島大学名誉教授)が担当し、羽白の東京転勤後は松浦道一(昭和九年文甲、西洋史教授、広島大学名誉教授)が引き継いで編纂した広島高等学校創立五十年記念事業準備委員会記念誌部編『広島高等学校創立五十年記念誌』(広島高等学校同窓会、昭和四八年)であり、四部構成の書籍として刊行された。¹²⁾ この記念誌の編纂過程で同窓生・教員等五三名から資料の提供があり、五〇年記念誌が広高の歴史を残すことを一つの目的としたため、広高の歴史に関する資料の収集も行われた。

さらに、一九八三年の創立六〇年記念大会の企画として、松浦道一を委員長とする広島高等学校資料保存委員会が立ち上げられ、関係資料の収集事業が本格化した。広島高等学校資料保存委員会には、同窓生・教員五五名から資料が寄贈され、創立六〇年の大会に合わせて簡易な目録が作成された(広島高等学校資料保存委員会編『旧制広島高等学校資料目録』一九八三年一〇月)。収集された資料は、この目録とともに、一月九日の記念大会当日に展示された。この広高資料保存

委員会が所蔵する旧蔵広島高等学校資料は、後に広島市立中央図書館に寄託され、保存されることとなった。その後、創立六〇年大会で収集された資料二七一点も、広島市中央図書館に併せて寄託された。

広島市立中央図書館では、広高資料保存委員会の分類をもとに整理をすすめ、六五年大会に合わせて目録を作成した(広島市立中央図書館・広島高等学校資料保存委員会編『旧制広島高等学校資料目録』(一九八八年一〇月))。その後、創立六五年(一九八八年一〇月)大会で展示された収集資料二五九点、および、創立七〇年大会(一九九三年(平成五年)一〇月)で展示された収集資料四四一点の計七〇〇点が広島市立中央図書館に寄託された。これらを合わせて、一九九四年一〇月の創立七五年大会において「総目録」が刊行された。この「総目録」に掲載された資料数は、一、三五九点(一、三〇四種類)にのぼる。その後も、二〇〇三年までの間に逐次広高同窓会より二八五点(二六三種類、六種二三点は、重複)の資料が広島市立中央図書館に寄託された。これらの資料群は、未整理のまま、「総目録」に掲載された資料とともに、二〇〇四月二月に広高同窓会の仲介により、広島市立中央図書館から広島大学文書館の前身組織である広島大学文書館設立準備室に移管されたのである。

この「総目録」と文書館所蔵の「旧制広島高等学校資料」との相関関係は、以下の図のようなものである。



(図-1) 「総目録」と文書館広高資料の関係

そして、これに、広島大学二十五年史編纂事業（一九七二年―一九七九年、三〇点（二八種類））、前身組織である広島大学五十年史編集室（一九九八年―二〇〇二年、一七点）、文書館設立準備室（二〇〇三年、広高同窓会から寄贈、二一〇点（二〇五種））、文書館（二〇〇三年―、三〇五点）がそれぞれ収集した資料の合計が現在の広島大学文書館所蔵「旧制広島高等学校資料」である。

文書館設立準備室の収集資料は、広高同窓会から寄贈を受けたものであり、二〇〇三年一〇月、広高創立八〇年記念大会において「広高二六年の歴史」展を総合科学部で行ったことが背景となっている。基本的に、文書館が収集した資料は、ご遺族からの寄贈と、同窓生が個人的に収集した資料および文書館が購入した資料によって構成されている。¹⁸⁾

文書館所蔵「旧制広島高等学校資料」の整理は、このように同窓会収集資料を中核としつつ、これに広島大学の年史編纂過程で収集した広高史関係資料および文書館が購入した資料を合わせてすすめられた。

本来、内容的かつ質的に違うこれらの資料群については、別途に整理すべきであったと反省している。文書館での目録作成は、当初、広島中央図書館での整理を意識し、広島高等学校史との関連で再整理を行ったが、途中から同窓会・広島高等学校資料保存委員会の整理方法に戻した。このため、全体を一覧するには便利ではあるが、同窓会収集資料としての特質が失われたとも考えている。また、所蔵関係が不明なものもあり（購入資料については、特に問題があった）、目録と

して完成度は高くない¹⁴⁾。そこで、以下では、改めて同窓会収集資料として広島関係資料の内容を解析し、その特質について述べることにしたい。

2-2 同窓会収集資料・広島関係資料の特質

より具体的に、同窓会によって収集された広島資料の特質・生成過程について見ることとする。

広島同窓会が熱心に収集したものの一つに、教官(六三点)、生徒(三三八点)を中核とする著書類が挙げられる。教官の著書については、同窓生が大事に保管してきた書籍も含まれている。また、同窓生が自著を同窓会に寄贈したものもあり、同窓会の大会を通じて著積されていた。同窓会としては、恩師の記憶とともにその著作を残し、併せて同窓生としての自らの実績を残すことを重視したと考えられる。

学園生活との関連では、教科書・ノートについて同窓生が所蔵していたものが集積され、プリントや、各種行事における配布物などとともに収集されていった。そして、課外活動では、校友会による文芸誌と、スポーツの関連資料が収集の中核であった。広島の場合、羽白幸雄が誌名をつけた『移動風景』(昭和二年(一九二七年)創刊)などは、完成度の高い文芸雑誌として著名であった。この『移動風景』については、一二号まで発刊されたが、残念ながら三冊しか所蔵がない。しかし、教室、寮、校友会各部等で発刊された様々な文芸誌・会誌が同窓生より寄贈され、所収されている(教室関係一九点、寮関係二二点、校友会関係五五点)。

運動部については、サッカーインターハイ優勝カップや、全国高等学校野球大会優勝時のウイニングボール(一九四二年(昭和十七年))など、校友会から同窓会に受け継がれたものが物品類として所収されている。広島蹴球部(サッカー部)は、一九二三年(大正十一年)に始まった全国高等学校ア式蹴球大会(インターハイ)に一九二六年から参加し、学制改革により最後となった一九四八年の大会まで、優勝四回を誇る強豪であった。最後の一九四八年の大会で優勝した広島に、そのまま優勝カップが残った。また、これらの大会は、全校挙げての応援の場でもあった。同窓会には、応援に使用した大杓子(宮島杓子・めしとれの意味で応援に使用した)や、校章旗も残されている。そして、文芸誌・会誌と同じように、部活動および運動会で製作されたメダルや手拭いなどの記念品が同窓生より、寄贈され、優勝カップを囲むように集積された(四三点)。

学園生活の中心は、薫風寮であり、寮祭などの場で寮歌が歌われ、生徒の心一つにした。広島の場合も「銀燭ゆらぐ」「怒涛の譜」などの名曲があり、同窓会で歌い続けられた。同時に、寮生活を彷彿とさせる絵葉書(一九点)やポスター(九点)も同窓生のもとに残され、それらが寄贈されて広島資料となり、今に至っている。これらの資料も、同窓生を通じて、寮歌に表象される寮生活を再現するものとして遺されたものであり、ある意味、寮歌を軸として資料群が形成されていった。

その一方で、校務関係の資料は、鈴木正利教授旧蔵資料に依拠している。鈴木正利教授は、広島に一九二七年四月から閉校となる

一九五〇年三月までの二三年間、地質鉱物・地理製図の教官であった(ペーブとの愛称で広高生から呼ばれた。その後、一九六〇年三月まで広島大学教養部教授、広島大学名誉教授)。鈴木正利旧蔵資料には、学校刊行物、校務関係資料(広高事件、戦後復興関係)、授業関係を含めた広範かつ膨大な文書が含まれていた。校務関係については、本来、広高の公文書として保存されていたはずであったが、被爆、移転、広島大学への統合、さらに、広島大学の学園紛争、西条キャンパスへの統合移転等の過程で、人事記録と生徒記録を除いて、その多くが失われた(現在、広高の後継組織に相当する広島大学総合科学部が所蔵)。それだけに、鈴木正利旧蔵資料は、広高の校務を再現するうえで極めて貴重な資料である。

アルバム(二一点)等の写真類も、同窓生により持ち寄せられたかたちで収集されていた。

他に、同窓会ならではの資料としては、同窓会総会・大会のたびに、展示に使用された恩師の写真パネル(二〇四点)、広高出身の丹下健三(昭和八年理甲、建築家、一九八〇年文化勲章受章)、近藤芳美(昭和九年理甲、歌人、一九九六年、文化功労者)、阿川弘之(昭和一五年文乙、小説家、一九九九年(平成一二年)文化勲章受章)等三人の写真パネルと関係資料も収集されている(四五点)¹⁵⁾。これらの資料は、総会・大会に際して展示され、または、対外的な展示に使用されたものである。また、同窓会自体の資料(団体文書)として、会員名簿、刊行物、会報等に関する資料三五三点も所収している。

以上、同窓会収集資料は、①同窓生が意識して収集した著作類、②

同窓生が学園生活を回顧するものとして保管した資料(内容的に、講義等、文芸誌、スポーツ、寮生活の四点に分類できる。資料には写真・アルバム等も含む)、③物品類のように校友会から同窓会に引き継がれた生徒保管の資料を軸に収集された資料群、④広高教授鈴木正利旧蔵資料を中心とする校務関係資料群、⑤同窓会が展示のために作成した資料群、⑥同窓会自体の資料(団体文書)、の六つの要因で構成されている。

おわりに

旧制広島高等学校資料は、基本的に、広島という地域性に依拠し、寮生活等を通じた教官と生徒、生徒間の紐帯が核となり、同窓生によって生成された資料群である。

広高は、生徒の過半が広島県出身(出身校・出身地)というだけでなく、濃厚な三年間の寮生活を送り、勉学・文芸・スポーツに打ち込んだ場所であった。創設期は、ストームなどで地域にも迷惑をかけたこともあったものの、被爆によって生徒のみならず、その家族をも失ったことは、より広島という地域性を意識としても強める要因となったと考えられる。また、教官と生徒間の密接なつながりが何よりも重要なことであった。教官と生徒との関係は、広高が閉校後も継続し、それが同窓会における資料の在り方を大きく規定したといえよう。

一方で、創立五〇年を契機に広島高等学校校史編纂的な収集も行われた。編纂の担い手は、広高出身の広島大学教員であった(羽白幸雄、

松浦道一、ともに教養部教授)。組織としての広高は、戦後の学制改革によって広島大学に包括され、教養部となったことで、教員組織が教養部として残り、一九七四年(昭和四九年)、教養部を改組した総合科学部に引き継がれ現在に至っている。広島大学教員であった彼らは、広高の伝統・精神を広島大学にも導入したいと考えたことは言うまでもない。新制広島大学は、初代学長森戸辰男が新渡戸稲造の弟子として旧制高等学校における人格教育を重視し、教養部における一般教育の充実を図ったことも、広高と教養部との連携を広高出身の広島大学教員に強く意識させることとなった。¹⁶⁾ こうした経緯の延長線上に、広島大学文書館が仲介となって高年齢化が進む広高同窓会と総合科学部同窓会の連携をすすめ、この連携が基盤となって総合科学部内に常設展示施設が設置された。

しかし、多くの同窓生にとって広高は、広島大学に包括されるべき存在ではなかった。元薫風寮史編纂委員長水口成則は、次のように述べている。

(前略) 廿五年三月の卒業証書には「広島大学広島高等学校文科の課程を卒業したことを証す」とあり、「広島大学広島高等学校校長 内藤匡」と「広島大学長 事務取扱 桜井役」の連名の変則的なものを貰い、「我々は広島大学とは無関係だ」と憤慨し乍ら卒業して行ったのであった。(後略)¹⁷⁾

この思いは、多くの広高卒業生が東京帝国大学・京都帝国大学に進学したこともあり、彼らの基本的な共通認識であった。その意味で、同窓会・同窓生の意識は、むしろ、現在も広島県下有数の進学校であ

る広島大学附属中学校・高等学校に引き継がれていると考えた方が自然ではないか、とも思っている。¹⁸⁾

すなわち、広高の組織的な系譜は広島大学に、広高の精神は、建物とともに広島大学附属高等学校に引き継がれ、今日にいたっている。旧制広島高等学校資料は、旧制高等学校史という観点から利活用を図るといふ側面からだけでなく、同窓生及び関係者が学園生活を後世に遺すという意志のもとで生成された同窓会収集資料として、同窓生のその後とも連関させながら、旧制広島高等学校の意義について再評価へと導くことができる資料群であると考えている。

〈参考文献〉

- ・『銀燭ゆらぐ旧制高等学校物語語広高篇』財界評論社、昭和四二年
- ・広島高等学校創立五十年記念事業準備委員会記念誌部編『広島高等学校創立五十年記念誌』広島高等学校同窓会、昭和四八年
- ・広島高等学校創立五〇年記念アルバム委員会「編」『広島高等学校創立五〇年記念アルバム青春の譜』広島高等学校同窓会、昭和四九年
- ・広島大学二十五年史編纂委員会編『広島大学二十五年史包括校史』広島大学、昭和五二年
- ・広島青春回想録編纂委員会編『広島高等学校創立六十年記念青春回想録―広島その永遠なるもの―』広島高等学校同窓会、昭和五八年
- ・広島七十年誌編纂委員会編『広島高等学校創立七十年記念落暉燃ゆ』広島高等学校同窓会、平成五年
- ・広島七十年誌編纂委員会編『広島高等学校創立七十年記念広高グラフ

テイ」広島高等学校同窓会、平成六年
 ・広島市立中央図書館編『旧制広島高等学校資料総目録』（広島同窓会・広島高等学校資料保存委員会協力、平成六年）
 ・『薫風寮史』復刻刊行会編『薫風寮史』（復刻版）広島高等学校同窓会、平成一〇年

・広島高等学校寮歌集編集委員会編『広島高等学校寮歌集』広島高等学校同窓会、平成一五年
 ・旧制広島高等学校昭和二五年三月卒業生『広高出てから50年記念文集』平成一二年。

・広島高等学校同窓有志の会編『廣高と原爆・被爆五五年・回想と追悼』平成一二年。

注

(1) 木田宏氏は、一九二二年二月二三日、広島県出身。旧制福山第一中学校（現、広島県立誠之館高校）をへて、広島高等学校、京都帝国大学法学部をへて、一九四六年文部省に入る。その後、文部省初等中等教育局地方課、大臣官房総務課長、日本ユネスコ国内委員会事務局次長、社会教育局長、大学学術局長、大学国際局長を歴任。一九七六年、文部事務次官。退官後、国立教育研究所長、日本学術振興会理事、国立劇場運営財団理事長等を歴任。また、成立とともに広島大学文書館顧問、二〇〇五年に亡くなられた。木田宏氏の旧蔵資料は、岐阜女子大図書館「木田文庫」として所蔵され、デジタル・アーカイブズとしても公開されている（木田宏教育資料アーカイブズ、<http://dac.jp/odat.ac.jp/vm/ktida/>）。また、二〇〇〇年から二〇〇二年まで二〇〇回にわたり、政策研究大学院においてオーラル・ヒストリーが行われ、代表の伊藤隆東大名誉教授とともに、小池もインタビューとして参加した（<http://www3.grips.ac.jp/~oralreport/view?item=100028>）。

(2) 文書館は、二〇一三年一月二日に開催された広島高等学校創立九〇年記念大会において、広島同窓会より感謝状の贈呈を受けた。
 (3) 熊平源蔵（一八八一年―一九七八年）は、金庫の販売・修理を行う株式会社クマヒラの創業者。広島商工会議所会頭、広島市会議員などを務めた。

(4) 石田雅春「昭和戦前期における広島高校の生徒構成分析」『広島大学文書館紀要』第一八号（二〇一六年二月）参照。

(5) なお、本講堂は、一九九八年に登録有形文化財に登録され、現在に至るまで使用されている。

(6) 関係図書として、広島高等学校同窓有志の会編『廣高と原爆・被爆五五年・回想と追悼』（二〇〇〇年、三二九頁）がある。

(7) 『薫風寮史』復刻刊行会編『薫風寮史（復刻版）』一九九八年七月、広島高等学校同窓会、三一―三二頁。

(8) 「広高の鐘」は、広島大学に継承してケースに入れて保管され、現在、広島大学文書館が所蔵している。ケースには、羽白幸雄による次のような説明板がつけられている。

これやこの吊鐘悄然として孤影をとどむるに似たれども廻れば遙けく旧制広島高等学校の草創に綿々として広島大学の新生につらなり物足りて心わびしき俗流に抗して毅然たり

思えば一隅に鳴る一点鐘にすぎずと雖も余韻は虚空に波紋してひろがり殷々翳々として盡くことなるべし

- (9) 基本的に、広高出身者は官界に多い。政界へは事務次官等官界をへて故郷・広島で議員になっている。経済界でも活躍しているが、オーナー企業の社長は少ない。

- (10) 広島大学文書館編『広島大学文書館所蔵旧制広島高等学校資料目録』二〇〇八年、広島大学文書館。

- (11) 広島同窓会会長佐藤秀雄「序」広島高等学校創立五十年記念事業準備委員会記念誌部編『広島高等学校創立五十年記念誌』（広島高等学校同窓会、昭和四八年）二二頁。

- (12) 「第一部 銀燭ゆらぐー広島高等学校五十年史ー」「第二部 黄昏る想いー広高の思い出ー」「第三部 征旅遠くー広高の闘魂ー」「第四部 怒涛の譜ー広高その永遠なるものー」とあり、総ページ数四七二頁。

- (13) 八五年と九〇年の同窓会大会におも資料が収集され、寄贈を受けているが、仮目録の段階である。

- (14) 当該目録は、小宮山道夫（現、広島大学国際室付准教授）が担当した。

- (15) 広高は二人の文化勲章受章者と、文化功労者を生んだ。後に、広高を包括した広島大学の場合は、初代学長森戸辰男（東大卒）が文化功労者である。

- (16) 小池聖一「森戸辰男の一般教育観」『広島大学文書館紀要』第一四号、二〇一二年三月。

- (17) 水口成則「薫風寮史復刻版刊行に際して」『薫風寮史』復刻刊行会編『薫風寮史（復刻版）』広島高等学校同窓会、一九九八年。（3）頁。

- (18) 同窓会は「アカシア会」といい、政官界・財界・学界等に広島大学以上に著名な人材を、供給している。なお、広高には、広島大学の包括校であった広島高等師範学校附属中学校（広島大学附属高等学校）の出身者も多い。旧制中学と広高との関係性については、旧制中学四修で広高に進学する者もいたが、広高生を輩出した広島第一中学（現、県立国泰寺高校）、呉第一中学（県立呉三津田）や福山第一中学（県立福山誠之館高校）では、最優秀な人材は、第一高等学校等のナンバーワンスクールに多く進学している。地域エリート校としての広高の評価は、旧制中学との関係から分析すべきであり、次なる課題としたい。

なお、本稿は、二〇一七年四月二二日、国立台湾師範大学における臺北高等学校創校九五周年、学養成與自治精神的傳承國際學術研討会における報告原稿を一部修正したものである。

（こいけ せいいち・広島大学大学院国際協力研究科）

**Documents of the former institution of Hiroshima High School:
On the characteristics of alumni association materials**

KOIKE Seiichi

Abstract

The former Hiroshima High School was severely damaged by the atomic bomb. The former Hiroshima high school materials were collected by the alumni association after the war, as a result of a general meeting. The materials valued by students mainly focused on documenting student life. The current paper analyzed the process of generating these materials.